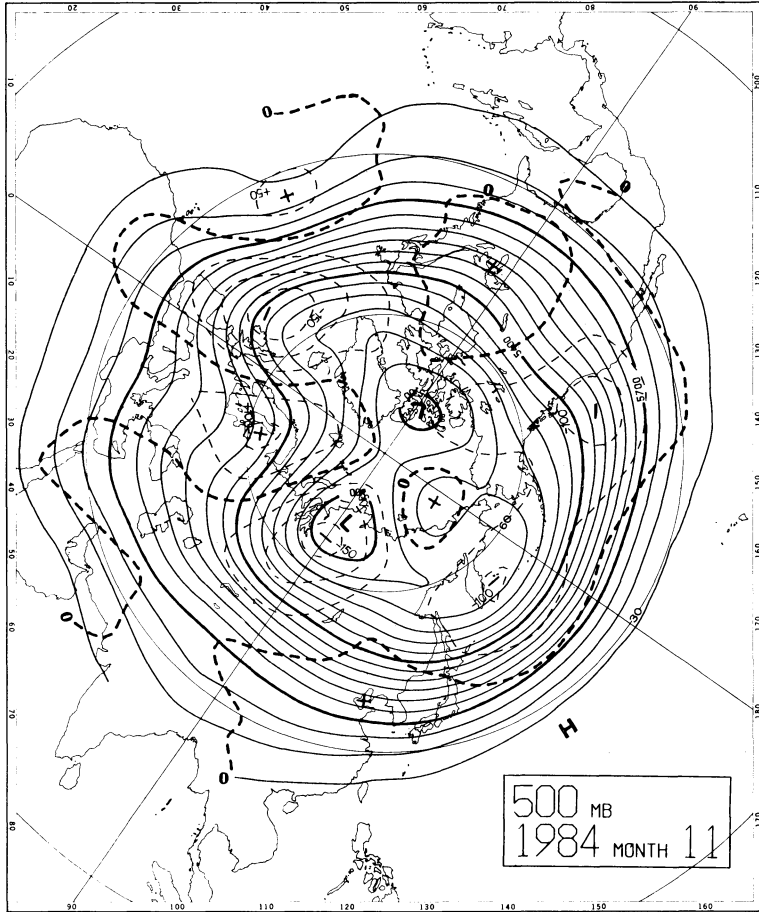


月平均500mb天気図。1984年11月。

(破線は平年からの偏差。単位 m)



ユーラシア大陸の尾根・谷と日本の寒暖冬予想

冬の長期予報においては、初冬12月の予想が重要な鍵を握っていて重要視されている。そして、12月の予想に際して最も注目されているのが、11月のユーラシア大陸上の大規模な尾根・谷の位置である。

12月が高温となる場合に対しては、現在2つの11月のモデルパターンが考えられている。一つは、西ヨーロッパ(0°E付近)が尾根となって正偏差に、その下流のウラル(50°E付近)が谷となって負偏差に、さらに下流のシベリア(90~120°E付近)で尾根が発達して正偏差となるパターンである。もう一つは北欧(30°E付近)で尾根が発達して正偏差に、その下流のシベリア高緯度(90°E付近)で極うずが発達して負偏差になる

パターンである。さらにこのモデルでは、アラスカ湾と北大西洋も谷となって負偏差に覆われる。

本年11月のパターンは、まさにこの2番目の12月高温モデルにきわめてよく似ている。注目すべきは、1番目のパターンの正負偏差を逆にしたパターンが、12月低温のモデルとなっていることである。従っても、北欧の正偏差域が20°ほど東へずれてウラル付近に位置したとすれば、12月は逆に低温が予想されることになる。この尾根・谷のわずかな位置の違いが、日本にまったく異なった天候をもたらすのは何故なのだろうか。興味深い点である。

(気象庁長期予報課 河原幹雄)